説教20211226ガラテア3：23-4：7ヨハネ1：1-18「の約束」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

聖書は、最初から最後まで、神と人間との間の約束を語る書物です。はじめに主なる神はエデンの園でアダムと約束し、最後には、新しいエルサレムがやってくる神の国を私たちに約束されています。そしてこの約束するということには、信頼関係が不可欠です。なんの信頼関係もない二人の間には、大した約束が取り交わされることはないでしょう。それどころかそういった二人ならば悪い約束を取り交わしてしまうことも避けられないかもしれません。いやいや、これは人間同士のお話です。聖書では、神と人との約束が語られていますので、そこには悪い約束などあるわけがないですので誤解しないでください。そして、聖書では信頼関係という言葉の代わりに、信仰という言葉が用いられていることを私たちは知っています。

今日は、聖書に入る前に、この世における信頼関係について少し振り返っておきたいと思います。「口約束」という言葉が世間にはあります。この言葉は今日の「言(ことば)の約束」という説教題と似ていますね。両者には重なる部分があるかも知れません。但し、「言(ことば)の約束」の方が口約束よりもはるかに固くて深い約束であるのは間違いありません。

私たちには、世間でいうところの口約束を軽んじてしまう傾向があります。例えば「契約書も取り交わさず、口約束だけでことを運ぶんじゃない、」などどいわれて叱責されたら、はい、ごもっともでございます、と引き下がるしかないかも知れません。又、法律事務所のホームページを見てみますと、「口約束でも契約になるって本当？」などと言った問い合わせに対する解説がなされています。これらのことは、私たちが世間で、口約束を軽んじていることを証ししています。

ところが、実は、この口約束こそ、契約を成立させる根本的な要件なのです。契約書というのはその契約を補完するための書類に過ぎません。そのように法律事務所のホームページにも書いてあります。私たちは、口約束を軽んじないで、口約束こそ約束そのものなのだと、心していく必要があるでしょう。

私たちが取り交わす約束というのは本来、契約書など必要としないことだったでしょう。また、お互いの口だけによる約束ということこそ、お互いの信頼関係を増し加え、強固にしていくように進展していくのでありましょう。例えば、年頃の男女がデートの約束をして待ち合わせる時に、その約束はお互いの口約束によってなされるもので、いうまでもなく契約書を取り交わすと言った世界ではありません。なぜならば、そこには、お互いの信頼関係や愛情関係を深めようとする目的があるからで、それこそが、はじめは、か細いお互いの信頼関係が深まっていく喜びであるからです。

このかぼそくて壊れやすい世界には、悲しみが伴うこともあるでしょう。デートの約束を一方がひたすら待ち望んでいたところ、もう一方はそれほどでもなくて忘れてしまっていた、などということが起こると、そこには計り知れない悲しみが沸き起こってくることでしょう。でもそのことに絶望する必要はありません。人と人との間では、長い人生の間にそういうことは必然的に起こることで、又、そういう悲しい体験をすることによっても、その人の、人を信頼する心は培われていくものだからです。

さて、聖書に入りましょう。ガラテヤの信徒への手紙3章 22節「しかし、聖書はすべてのものを罪の支配下に閉じ込めたのです。それは、神の約束が、イエス・キリストへの信仰によって、信じる人々に与えられるようになるためでした。」

神の約束は、イエス・キリストへの信仰によって、信じる全ての人々に与えられるということは当たり前のことです。ここで問題になるのは、私たち人間の側の信じる心です。イエス様は、ひたすら、あなたとお会いすることを待ち望んでおられるのですから、あなたが、イエス様を信じて、待ち望めば、間違いなく、あなたはイエス様とめぐり合うことが出来るのです。このように解き明かすと、イエス様との約束はなんと簡単で、しかも確実だということで、うれしくなりますね。イエス様はこのクリスマスの時に、ベツレヘムの馬小屋の飼い葉おけの中に、私たち人間と同じ肉となって乳飲み子の姿で誕生されました。そうしてイエス様を全ての人を救う救い主、この世に大きな喜びをもたらすお方、と信じる者には、その通りの方として出会って下さるのです。つまり、私たちは、イエス様を信じるだけで、全世界と結ばれ、全世界を手に入れることが出来るのです。聖書は、「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。」と語っています。私はイエス様と結ばれて、神の子なのだ、という信仰、これは私とイエス様との間に信頼関係が結ばれ、深められていくということです。今日のガラテア書では、律法は随分悪いように書かれています。「信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。」というように記されています。でもこの言い回しは、私たちが、イエス様との、いわば契約書に寄らない口約束だけでの信頼関係を深め固くしていく喜びを、浮き立たせるための言い回しであると理解したいと思います。その次には、「律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となった、」とも記されています。

旧約の時代を通して、神様と人間との間には、様々なことが起こり、悲しみ喜び、怒り嘆き等、多くの感情が記録されています。そしてそこには律法がありました。律法とは、神様によって人間に与えられた、二枚の石の板に代表される契約の文書であります。確かに人間は、この律法によって監視され、閉じ込められていて、自由ではありませんでした。人間は律法の書に記されている一字一句を守って、神様に認められて救われようとしました。でも、それは不可能なことでありました。それでも人間は律法を完璧に守ることを追い求めることを止めず、かえってますます主なる神との約束から遠ざかっていったのでした。

そもそも、主なる神は、はじめ、人間との約束を口約束によって与えられました。それが有名なアブラハム契約です。創世記１５章、旧約聖書19ページ20ページにそれは記されています。お読みします。

主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。。。

その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、

この様に主とアブラハムとの間で取り交わされた約束が記されております。この重い内容の約束を、主なる神は契約書など用いない口約束だけで取り交わされたのでした。それはなぜなのでしょうか。それは神様の口は嘘をつくことが出来ない口だからです。それに引き換え、人間の口というのはややもすると嘘偽りを宣べてしまう口なのです。だからその後、神様は人間に律法という契約書を与えざるを得なかったのでしょう。

しかし、時代は下りますが、エレミヤ書7章 23節、旧約聖書1189ページ

むしろ、わたしは次のことを彼らに命じた。「わたしの声に聞き従え。そうすれば、わたしはあなたたちの神となり、あなたたちはわたしの民となる。」

と主なる神は人間に口による約束に立ち返ることを求めておられるのです。

そうして、この口による約束が成就したのが、新しい契約すなわち新約聖書であり、イエス様が肉となってこの地上に来てくださった出来事なのです。

今日のヨハネ福音書には、ことばは神であった、と記されています。神様が発せられる一言一言は、嘘をつくことが出来ないまことのことばであります。ことば自体が神様であります。そうして、ことばは肉となって、この地上に来てくださいました。わたしたち人間と同じ、乳飲み子の姿で。それがイエス様であります。イエス様ご自身がことばであります。イエス様が与えられたのは、主なる神の口による約束であり、ことばの約束であります。　　私たちは、その神の口による約束、ことばの約束を、信じる心を深くされ固くされることで、ますます大きな喜びを味わうようになります。それはガラテヤ書の言う通り、イエス様を神の子と信じる信仰です。イエス様を神の子と信じた時、私たちには、人種による差別も、身分による隔ても、男とか女とかいう偏見もなくなるのです。このことは、私たちがイエス様を信じる信仰によって、私たちがキリスト・イエスにおいて一つだと、信じることによって起こるのです。このことは、律法などと言った契約書による関係性よりも、比べ物にならない救いと喜びとを私たちにもたらすのです。

こんなに単純で清々しい信仰、ただ、ことばであるイエス様を神の子として、自分の中にお迎えして信頼して共に生きていくというだけのこと、なのですが、この信仰が得られない、或いは深まっていないというのも又、この世にあっては事実です。そのこともガラテア書は語っています。４章３節「同様にわたしたちも、未成年であったときは、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました。」パウロは、この世を支配している諸霊のことを語っています。これは今の世で、具体的にいえば、人々が、お金を崇拝することによって動かされ、その心が荒んできてしまうことですとか、人々が口約束を軽視して、契約書の効力を過度に主張するなどと言った暴力的な行いなどをさすのでしょう。

再度申し上げますが、私たちの信仰は、単純で、しやすいことであります。ただ、クリスマスに与えられた、イエス様を神の子と信じればよいのです。ただ、それだけです。そう信じれば、私たちは心から、主なる神を「アッバ、父よ」と呼ぶことが出来る聖霊を受けることが出来ます。その時、私たちは口による約束によってその信頼関係がますます深められ、喜びに満ちて、神の子とされるのです。私たちはこの世に山積する、余計な諸霊を振り払い、ただこの神が与えて下さった御子イエス様を信じましょう。そうして今も生き支配されている、御子イエス様と私たちは、日々、口約束を取り交わしながら、日々を守られて、信仰する喜びを深められながら、暮らしてまいりたいと願います。